

京都女大短大 國嶋道子

【目的】 第二次世界大戦後の食寝分離の普及により、一般家庭でも食事空間の椅子座化が進められ、今日では子供部屋や居間などでも椅子座が極普通となっている。しかし、空間の大きさ自体従来の畳の大きさを基本とし、椅子座化を進めるに十分な広さが確保されているわけではない。また、専用の接客空間を持つ家庭も都市部では少なく、洋室となっている居間で接客と団らんに兼用していることが多い。本研究では、家族の団らん空間としての居間がどの様に住まわれているのか、「椅子座」生活の実態とインテリアの関わり、主婦のインテリアに対する意識について明らかにする。

【方法】 公私室分離が可能であると考えられる3~5LDKタイプの建売り分譲集合住宅に居住する主婦を対象にアンケート調査を行い、有効票241(有効回収率90.1%)を得た。調査内容は居間における家族の住み方と公私室の関係、居間に置かれている家具やその他インテリアエレメント、インテリアに対する主婦の考えなどである。

【結果】 夫婦が40才代、子供は青年期の核家族が多く、3世代同居世帯は極めて少ない。LDKのつながり方では、台所が独立しているタイプが多い。居間には、ソファーセットやリビングセット、サイドボードなど接客を意識した家具が置かれており、家族の居間での姿勢からみてソファーを置いていても床やソファーでゴロ寝をしているものが多い。インテリアに興味を持ち、室内意匠を自分なりに考えている主婦も多いが、ソファーセットのように先入観だけで家具を置いている家庭もみられ、団らんの場としての特色ある居間づくりはまだ十分になされていないといえる。